

マキャベリの政治理論の基礎

——歴史的方法について——

森 尾 忠 憲

I は し が き

マキャベリの政治理論が、倫理学および神学からの政治学の解放と自律化とをなしとげ、この意味で近代政治理論の発端をなすということは、今さら改めて記すまでもなく明らかな常識である。本稿は、この通説に対してなにものかを付け加えろとか、まして通説を批判するということを目的とするものではない。本稿は、国家権力の構築という観点に立って、マキャベリの政治理論がなにを提供するのか、そしてそれはいかなる根拠によるのか、ということの問題にする。詳しく言えば、本論文の意図するところは、その前提として、一方では、マキャベリの政治理論を「悪の教師」あるいは「善の教師」とみなす解釈や記すに値しないが、彼の政治理論に含まれる支配技術を矮小化してそこに俗悪な「マキャベリズム」を再発見したり、あるいは、それよりは高度な外観をもってはいるが、マキャベリの政治理論のうちから「技術的合理主義」を一面的にとりだして、これを統治の秘技（アルカナ）とみなし、あまつさえそこに独裁の必然性に資する理論的根拠を見いだす解釈を念頭におくとともに、他方ではマキャベリを近代の始祖とみなすのみか自由の擁護者であると論じ、熱烈な愛国者となす諸解釈をも同時に視野に入れつつ、この前提に立って、政治的社会的変動に随伴する国家権力の変革という問題ならびにそれに関連する諸問題、すなわち政治権力の組織化、制度化、形骸化の諸問題に対して、マキャベリがなにを示唆するのか、とりわけ近代の政治思想家のうちのあるものが示す「共和主義者」としてのマキャベリが、なにを

示唆するのか、を問題にしたい。

この課題に対応するためには、なによりもまず、彼の主著を貫徹している政治理論の方法としての「歴史的方法」の究明が試みられねばならないと思われる。なぜならばマキャベリは『フィレンツェ史』はもちろんのこと『ローマ史論』や悪魔の書『君主論』においてすら、「歴史的方法」を採ることを明言しているのであるから。

しかしながら彼のこの方法が、かようにして主著に明示されているということだけが「歴史的方法」を最初にとりあげる理由ではないことは言うまでもない。マキャベリが明示するこの方法は、決してただちに政治理論の方法そのものであったばかりか、実に、この方法としての歴史は、むしろ「歴史観」として、その基底に、世界観および人間観をもつものであり、これらによって支えられているのであるから。マキャベリにおける方法としての歴史は、単に方法としてのみか、たとえ体系化されていないにせよ、漠然たるものとしてであれ、ある種の「思想」によって支えられているのである。言うまでもなく方法的意識は、その前提としてその組織化の程度に差はあれ、一定の体系を予想することなくしては生起しない。あるいはある種の世界解釈が、かえって方法を規定すると言うこともできるであろう。この事情は、改めて記すまでもあるまい。ホッブズやスピノザのような体系の構築を行なわないマキャベリのような非体系的で直観的な思想家のタイプにあっては、方法と体系との関係が明確でないだけに、かえって政治理論発生の母体としての「思想」の次元にまで立ち入って、思想と理論との媒介

項としての方法の性質を究明する必要がある。そしてなによりもまずわれわれの観点が、ますますこの種の究明を要求している。

以下においては、彼の歴史観を究明したい。そして後刻、機会を得て改めて彼の歴史観の基底を究明したいと考える。

II 政治理論の対象

——自然主義的人間把握——

a) マキャベリは、『ローマ史論』(*Discorsi sopra le prima deca di Tito Livio; Discourses on the First Decade of Titus Livius*)ならびに『君主論』(*Il principe; The Prince*)¹⁾において彼の執筆目的とその対象および方法を明示している。

マキャベリが示す執筆目的とは、①既成の政治理論とりわけユートピア国家観に反対して、②読者にとって²⁾あるいはすべての人にとって³⁾直接に役立つ理論を提示すること⁴⁾である。理論の実効性こそが、マキャベリのこれら著書の目的であり、これこそが彼が示した既成の政治理論から彼のそれを截然と区別するものであることを強調した。そしてマキャベリは、彼のこの企てが前人未踏の世界への最初の出発であることを自負している⁵⁾。この自負は、近代初期の諸理論の構築者に共通のもので、17世紀のホッブズやスピノザにもまた認められる⁶⁾ところである。

1) 以下におけるマキャベリの著述からの引用は、ギルバートの英訳から行う。“Machiavelli the Chief Works and Others,” translated by Allen Gilbert, 3 vols., Duke University Press, 1965. 引用にあたっては大岩誠訳『君主論』、同訳『フィレンツェ史』、池田康訳『君主論』、永井三明訳『政略論』等のすぐれた邦訳を参照し、多くの示唆を与えられた。

2) *The Prince*, 15, p. 57. 以下においては *Prince* と略記する。

3) *Discourses on the First Decade of Titus Livius*, I, 1, preface, p. 90. 以下においては *Discourses* と略記する。

4) 「私のねらいは、読む人が直接に役立つものを書くことである。」*Prince*, 15, p. 57. 「私はすべての人々にとって共に役立つことを行いたいという自然の望みによって、いままでいかなるものも立ち入ったことのない未知の道に踏み込もうと決心した。」*Discourses*, I, preface, p. 190.

5) *Ibid.*

マキャベリが示した著述の目的は、彼の政治理論の性質を端的に表現する。すなわち彼が目差す政治理論は、プラトンやアリストテレスのような哲学者の政治理論、アウグスチヌスやアキナスそしてルターやカルバンのような神学者のそれではなく、ましてリプシウス(J. Lipsius)やエラスムスのような思想家のそれでもなく、端的に政治権力の奪取と維持そして拡張の主体としてのまた民衆統治の主体としての政治家のための実践的理論である。確かにマキャベリの著述は、この理論の性質を裏付けるような標題をもつ多数の章節を含んでいるのであり、煩わしい引用によって証明する必要もないほどである。彼の政治理論は、権力技術であって政治理論ではないといって決して過言ではない。この全く明らかな事実に基づいてマキャベリの政治理論を「支配技術」としての秘義(arcana)とみなす解釈は、現代においても跡を絶たない⁸⁾。そしてこれを成り立たしめる根拠も、すでに記したようにマキャベリの著書に事実あるとすれば、われわれもまた、この解釈の当不当を論じたり、ましてそれを全面的に否定することはできない。

6) T. Hobbes は、『物体論』の献辞で政治理論史上の自己の位置を、ガリレイやハーベエの自然科学における地位と比較しながら、政治学は、彼のものをもって始まると自負している。伝統的政治学は、紛争をもたらしたばかりかこれを促進して来たと言はる。 *English Works*, vol. I. *De Corpore*, Ep, ded, pp. viii-ix. *Leviathan*, IV, XVI, pp. 435ff. マキャベリのユートピア国家観および伝統的政治学に対する批判とほとんど同様の基調で、スピノザは、ユートピアン、詩人、哲学者や神学者の政治理論が「あるがままの人間ではなくして、そうあってほしいと思う人間」観に依存して政治理論を構成して来たが、それはキマイラ(chimaira)以外のなにものでもないと言う。ホッブズの自負とはやや異なるが、スピノザは経験に依存する政治家の書いた政治理論に左担しつつ、彼は、これに新しいものを付加するのではないが、「これと最も調和し、これを確実でかつ疑う余地のない理論によって証明すること、そしてそれを人間的な自然の状態から導出しよう」としている。『政治論』(*Tractatus Politicus*) “Spinoza Political Work,” edited and translated by A. G. Wernahm, Oxford, 1958, ch. 1, §1, §2, p. 261.

7) 『君主論』や『ローマ史論』の多くの章節は、この意図を示すものによって満たされている。とりわけ、*Prince*, ch. 1, 「君主国の複数とその獲得方法」を参照のこと。

8) 例えば C. Schmitt, *Diktatur*, Kap. 1, S. 12.

とはいえマキャベリの政治理論にまつわるこのプラグマチックな性質を指摘し、それを強調したところで決して、多面的な相貌を示す彼の理論を十二分に解明したことにはならない。いなむしろ、問題は、そこから始まるというべきであろう。なにゆえなら、この著述目的に明らかに認められる「実効性」は、しかれば、いかなる根拠によって保証されるのか、が問われなければならないのであるから。実効性は、その前提として経験的であれ合理的であれ、あるいはその整合性の程度のいかににかかわらず、理論的性質をもつ根拠なくしては、成り立ちえないからである。問題をここに求めるならば、マキャベリのいう理論の実効性の根拠は、彼による人間的・自然（本性）の構造的・機能的規定であるということがいえる。これこそが、彼の政治理論の理論的根拠であり、彼の理論の実効性を保証する根拠であり、それによって彼は、彼の理論の実効性を自負することができたのであった。われわれはまず第一に彼の言う人間的・自然の規定に言及しなければならない。

すでに言及したように、マキャベリはユートピア国家観を批判したが、その理由は、この理論が、人間活動の当為規範に立脚しているがためであった⁹⁾。それに対してマキャベリは彼の理論が事実性に、すなわち現実のうちにある人間の存在と活動との考察に立脚するがゆえに実効性をもつと論じた。

言うまでもなく、プラトンの哲人国家観以来、その理論の背景にある種の人間規定があつて¹⁰⁾、それが理論家の期待を反映していることはしばしば指摘されて来たところである。それに対してマキャベリは、人間の存在と活動、人間の実際の生き方、現に生きて生活している人間の実態¹¹⁾や古代の諸先例、すなわち直面する問題に対する政治家や偉人の対応¹²⁾を、考察の対象であるとした。マキャベリにみられるような現在

における人間の活動と過去における人間の諸活動との時間を超えた取扱いの理由については、次節以下において究明するが、マキャベリがとりあげる対象としての諸人物は、古典古代や中世期の政治理論の対象とは著しい対照をなし、政治抗争に没頭する政治家、権勢家、諸種の専制君主、法王そして当時においてめざましく活躍した傭兵隊長、貴族、僧侶、そして大小市民である¹³⁾。経験的可視的かつ具体的なこれらの生きた人間こそ、マキャベリが考察の対象として採りあげるものである。しかしながら権力や富や名誉への希求に満ち、それらの希求に伴う諸激情のままに活動する具体的な可視的な諸個人の活動は、経験的・日常的事実ではありえても、直接に無媒介に理論の対象とはなりえない。これらの欲望やそれに伴う諸激情がなにに起因し、なにを根拠とすることによって出現するのか、そしてなにゆえに人間活動を支配するのかが問われなければ、それらは理論化できない。こうしてこそ経験的事実は理論の領域に入りくることができ、かつ理論的に整序できるのであるから。

マキャベリにとってもまた、当然、この考察の対象は、共通性をもたずそれゆえ無規定的で、抽象化できない個別的・特殊的存在ではない。却ってこの対象は、その存在の根源において自然的規定を与えられたものとみなされている。

マキャベリは、『ローマ史論』において人間存在の自然的規定について言及している。「自然が人間を造ったとき、一方では人間がなにごとをも切望する (crave) ことができるようにしておきながら、しかも他方ではなにひとつ望み通りに実現しないように仕組んでおいた。」¹⁴⁾という。マキャベリが言うこの人間存在の自然的規定によれば、人間とはなにによりもまず自然によって規定されているもの、神によってではなくかつまた社会によって規定されているのでも

9) Prince, 15, p. 57, cf. Discourses, I, pref., p. 190.

10) Platon, *Respublic*, vol. 5, vol. 7. Aristotels, *Nicomachos Ethik*, vol. 5, *Politics*, vol. 1.

11) Prince, 15, pp. 57-58.

12) Discourses, I, pref., pp. 190-191.

13) 彼の主著『君主論』と『ローマ史論』のいたるところにみうけられる。このような傾向は、同時代の T. More の *Utopia* (『ユートピア』) や D. Erasmus の *Querela Pacis* (『平和の訴え』) においてもみとめられる。

14) Discourses, I, 37, ¶p. 272.

なく、その根源において自然によって規定されたものとみなすが、ここに彼の規定が自然主義的規定であることが明らかに示されている。つぎにこの規定によれば、人間的存在は、その根源において「欲望」(craving)として捉えられるが、この把握は、理性あるいは知性を含む精神的規定ではなく、人間性の根源が欲望以外のなにものでもないことを意味している。さらに、この規定は、この欲望に対応してその「実現能力」(power to attain)が与えられていることを示すが、この能力が欲望に対して対立的なものとして与えられているとはみなされず、かえってこの欲望の達成手段として与えられていることに注目したい。精神的身体的諸能力は、目的としての欲望に対してそれを達成する手段にほかならず、とくに精神的能力が欲望に対してこれを抑制しあるいは、統制するものとして倫理的規定を含むものではないことを示している。すなわちこの規定は観想的生活(vita contemplativa)を特徴とする思想家の存在規定ではなくして、活動生活(vita activa)を特徴とする実践家の存在特徴を規定するものにほかならない¹⁵⁾。それゆえに人間存在を規定するこれらの二契機の関係から推して、欲望こそ人間的自然の本質として捉えられているといえることができる。これこそが、マキャベリの人間論を自然主義と称する根拠である¹⁶⁾。

ところでこの人間的自然の規定は、欲望とその実現能力との関係に即してみれば人間の活動規定として著しい特徴を示す。この規定によれば、欲望はいかなることをも望むことができるのであって「無限定性」をその属性とするが、それに反して実現能力は、欲望の無限定性に比して有限性を属性とする。これら全く量的差をもつ二要素が一個の人間のうちに与えられていると言うのであるが、かくて相互に相反する契

機からなる人間的自然の存在をその活動の面に即して捉え直すならば以下のように言うことができる。

本来自然的規定として所与のこれら二属性のうち、欲望は論理的にその実現能力に先き立ち、この根源的規定たる欲望の充足を助成し達成するものこそ実現能力であるから、人間活動はこの自然的規定たる欲望によって規定されるのではあるが、この欲望は、実現能力が有限的であるがゆえに不断に制限されざるをえない。それゆえにこの欲望は、まさに可能性に留まり、その実現を保証されてはいないのであるから、人間存在の状態は、不断の欲求不満の状態であり、この状態が人間存在の常態であるといえることができる。この不満を解消するためには種々多様な活動が必要とされよう。こうして人間活動の諸様相が導かれる。すなわち人間は自然によって規定されたこの状態のゆえに、これを解消せんとして不断に活動に駆り立てられざるをえず、欲望の対象、具体的対象としての財貨、社会的地位や政治的地位は有限であるのが常態である以上、社会関係のもとにある諸人間間には、対象の獲得をめぐる対立が発生し、ここからさらに敵対と抗争そしてそれに伴う嫉妬、敵対心や野心等¹⁷⁾の諸激情に規定される党派等の諸活動が生起する¹⁸⁾。かくしてマキャベリは、この関係が、人間の運命の変化や抗争、さらに国家の盛衰の原因であると論ずる¹⁹⁾のである。これら諸欲望のうち最たるものは、私有財産の獲得欲とその維持欲である。こうしてマキャベリは、自然による人間の根源的規定から対立、敵対および戦争等の諸事象を導出したのであった。

マキャベリは、人間の存在と活動とに対する自然的規定を上記のようなものと考えているが、これが自然的規定であるがゆえに、二つの特徴が帰結する。まず第一は、この規定のゆえに、時と所とを問わず、人間的自然は、不変

15) J. G. A. Pocock, *The Machiavellian Moment Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*, pp. 56-57.

16) K. Sternberg, *Die politisuer Theorien in ihrer Geschichtlichen Entwicklung vom Altertum bis zur Gegenwart*, 1922, S. 55.

17) *Discourses*, I, 37, p. 272.

18) *History of Frolence*, preface, p. 1031. 以下においては *History* と略記する。

19) *Dicourses*, I, 37, p. 272. *History*, vol. I, p. 1232.

であり恒常であり、普遍的に妥当するもの、デルタイのいう人間的自然の同形性 (Gleichformigkeit)²⁰⁾ である。第二に、人間的自然の同形性は不変であり、恒常的であるがゆえに、過去における事実と現在における事実とは時間を超えて同一視できるものとみなされる。かくてマキャベリはいう。「いつの時代を問わず、この世のすべての出来事は、過去のそれに極めてよく似たものをもっている。つまり人間は、行動を起すにあたって、つねに同じような欲望に動かされて来たので、同じような結果が起って来るのも当然である」²¹⁾と。

われわれは、以上においてマキャベリの人間本性の規定をみて来たのであるが、マキャベリの人間規定は、なりよりもまず人間を「自然的被造者」²²⁾ とみなすところの自然主義的人間把握であった。そしてこの人間把握は、静態的存在としては同一性を²³⁾、動態的活動としては「自然力の発現、エネルギー」²⁴⁾ であると理解されるのである。ダンニングはこれを「物質的個人主義」²⁵⁾ と特徴づけるのであるが、それはまさに、情念の解放を意味する²⁶⁾ ものであった。

ところでマキャベリの人間的自然の規定を、「人間的自然の同一性」と特徴づけられるとすれば、この人間論とマキャベリのいう「歴史的方法」とは、いかなる関連に立つのか、そしてすぐれた意味での作為であり活動であると歴史を理解するとすればその可能性はなにか、が問われなければならない。

20) W. Dielthey, *Auffassung und Analyse des Menschen in 15 und 16 Jahrhundert in Gesammelte Schriften*, Bd. II, S. 29.

21) *Discourses*, III, 43, p. 521, cf. I, 39, p. 278, II, pref., p. 321.

22) Sternberg, *a. a. O.*, S. 55-56.

23) E. Cassirer, *The Myth of the State*, Yale University Press, 1961, p. 125.

24) Dielthey, *a. a. O.*, S. 34. *Naturkraft*, S. 24, *lebendige Energie*.

Hippel は、中世における nominalism にこの人間自然の理解の系譜を求めている。Ev. Hippel, *Geschichte der Staatsphilosophie*, 2 Aufl., Bd. II, 1958, S. 10.

25) W. A. Dunning, *A History of Political Theories Ancient and Medieval*, 1908, p. 305.

26) L. Straus, *Natural Right and History*, Phoenix Books, 1965, p. 180.

III マキャベリの歴史観

——循環史観と実用主義史観——

マキャベリは、人間的自然の規定において、その同一性を論じたのであるが、この時と所とを問わず妥当する人間本性が、マキャベリの歴史観の原理的出発点である。マキャベリにとって歴史は、なによりも経験、先例、模範とみなされたのであった。以下においては、マキャベリの歴史観のこの人間論からの展開を究明したい。

マキャベリの『ローマ史論』は、その題目が示しているようにリビウス (Titus Livius) のローマ史²⁷⁾ に対する論考の形式を採用した歴史記述であり、しばしばリビウスの一般命題を借用して自己の歴史観や政治理論を補強したり、事件の解釈のために援用したりしている。この叙述と同時に、マキャベリは当時の古代観に言及して鋭い批判を加えた。彼は当時の古代観の諸傾向を要約して骨董趣味や古代軽視と称した。マキャベリによれば骨董趣味とは革新の気性を失って肥大化し飽満化した都市貴族の骨董趣味にほかならない。彼等にとって古典古代とは、「古代の彫像のかけらを、巨額の金を払って買入れ、座右に置いてなでまわしたり、家の誇にしたり、さらに芸術家に依頼して模造させるのに懸命になる」²⁸⁾ 対象であり、その精神態度は、好事家の趣味であり、彼等にとって古典古代は、その精神的強靱を示す精神的道徳的模範ではありえない。古代無視とは、「古代の王、軍人、市民、立法者そのほか祖国のために一身を犠牲にして活躍した人々に対しては、彼等の行為を手本にしようとせず、口先だけで賛美し…(中略)…古代の痕跡をすら認めようとせず、却って彼等を軽視する」²⁹⁾ ものの精神的態度にほかならない。マキャベリによれば、古代趣味や古代無視に示される思いあがった無視や、

27) リビウスの『ローマ史』は、140巻の大著であるが、7世紀から散逸し15世紀には第1～10巻、第21～45巻が発見されたと言われている。

28) *Discourses*, I, pref., p. 190.

29) *Ibid.*, I, pref., p. 190.

イタリア各地はもちろんのことキリスト教国家の諸地方や諸都市に広がっている無気力や虚弱さは³⁰⁾「真の歴史知識の欠除」³¹⁾に由来する。

しからばマキャベリにとって真の歴史知識とはなにを意味するのか？

マキャベリの『ローマ史論』は、リビウスのローマ史を手がかりにして古代ローマの歴史のうちに、その隆盛と衰微との諸原因を探り、それによって政治的教訓を獲得しようとする試みにほかならないが、この教訓の獲得こそが歴史であり、そしてその源泉としての古代ローマこそ、それに倣いする歴史を意味した。

古代ローマに対する言及は、人文主義の先駆者ダンテや帝権擁護論を展開したマルシリオに遡及するが³²⁾、彼等にとってローマは、政治の理念であり、賛美の対象であった³³⁾。マキャベリの場合もまたこの系譜に連なり³⁴⁾、ローマは1個の理念として捉えられる³⁵⁾が他方において、ダンテやバドゥアとは異なってローマの形成と維持そして衰微の諸原因の究明を目的として読みこまれ、ここから権力の獲得、維持と喪失とに関する一般命題を獲得しようとするものである³⁶⁾。したがってマキャベリは、歴史を先人によってなされた問題解決のための諸対応を意味する「先例」とか政治活動のための「模範」と同一視する。またこのような歴史の見方に関連して、「対症療法」³⁷⁾とみなすのである。マキャベリは、この歴史の理解の仕方を以下のようにいっている。「予見するために過去に目を向けよという識者の提言は、真理である。」³⁸⁾と。な

にゆえなら時代のいかに問わず、現在生起しつつある出来事は、過去において極めて類似した先例をもつのであり、それは人間の諸行為が同じような欲望によって導かれて来たからにほかならない。マキャベリはこうして歴史を、問題解決のために用いるものと理解するのである。

ところで歴史を、直面する問題の解決のためのもの、歴史を教訓や先例、手本とみなす歴史観は、ヘーゲルがいう「実用的歴史」(pragmatisch Geschichte)³⁹⁾にほかならない。ヘーゲルは、この歴史観の特徴を、歴史を、道徳的教訓の獲得源とみなすものと指摘しているが⁴⁰⁾、この教訓の属性がなんであれ、マキャベリの歴史観もまた、政治的教訓と過去の経験をみなすものである。この意味でマキャベリの歴史観が道徳論との関連でどうあるのかは問題であるが、それは当面、問題にしない。とにかくマキャベリにとって歴史は、政治的関心との関連に立つことに注目しなければならない。後節において言及するが、古代及び人文主義においてみられるように、過去の事実を道徳的教訓とみなす観点は、マキャベリにとっては無縁である⁴¹⁾。

しかしながら、歴史をこうして実用化できる根拠は、いったいなにであるのか？ 歴史が、一回限りのものであり、個別性を意味するなら、また歴史が、直線的かつ拡大してゆく進歩とみなすなら、過去に政治的行為の教訓を求めることは、不可能であろう。マキャベリにとっては、

38) Ibid., III, 43, p. 521. I, 39, p. 278.

39) W. G. Hegel, *Vorlesung über die Philosophie der Geschichte*. 武市健人訳『歴史哲学』27頁。実用的歴史に関してヘーゲルは、その誤りを以下のように指摘している。「各時代はそれぞれ特有の境遇を有し、それぞれ極めて個性的状態にあるものであるから、各状態の中で各状態そのものによって決定されねばならないものであり、またそうしてのみ決定され得るものである。世界のいろいろな出来事の雑沓の下では、一般原則もいろいろな類似の関係への回想も何の役にも立たない。なぜなら色褪せた回想などといったものは、現在の生命と自由とに対しては何の力ももたないからである」。

40) Ibid., S. 17. 同訳書、27～28頁。

41) マキャベリの宗教観にみられる道徳観がいかなるものかは、歴史観とは異なった観点から究明されるべきであろう。公的政治的責任の問題あるいは政治的リーダーシップの問題として重要な問題点を含むであろう。

30) Ibid. I, 12, pp. 228-229. II, 2, pp. 330-331.

31) Ibid., I, pref., p. 191.

32) D. Entreve, *Dante as a Political Thinker*, 1952, pp. 5-6.

33) F. J. C. Heanshow, *The Social and Political Idea of Some Great Thinkers*, 1923, p. 2. *Social and Political Ideas of the Renaissance Reformation*, "A Series of Lectures Developed at King College University of London," 1925, pp. 89-90, von Hippel, a. a. O., S. 359-360.

34) Heanshow, *ibid.*, pp. 91-92.

35) *Discourses*, II, 2, pp. 328-330. I, 18, p. 240. 37, p. 272.

36) *Discourses*, I, 4, p. 202 and *passim*.

37) Ibid., I, pref., pp. 190-191. III, 1, pp. 419-420.

歴史の実用化は、実は、歴史の経過を循環とみることによって可能であり、この根源は、人間的自然の恒常的不変的同形性である。

繰り返すまでもなくマキャベリにとって人間的自然是、自然的規定であるがゆえに不変であり、同一であった。それゆえに、現在生起しつつある諸事実は、過去において生起したであろうし、将来においても生起するであろうと言うことができる。人間的諸行為は、その根源を等しくするがゆえに時間を超えて同一である。マキャベリにとって人間が自然によって規定されていたように、歴史は神によって規定され、かつまた一個の法則性を刻印されているとみなされる。

「現在のすべてのものに寿命があるということは、疑いの余地なき真理である。しかしすべては神によって辿るべき循環の道を完全に定められており、この道を踏み外すことは許されない。そして一定の法則のもとにその存在に変化がないように保たれており、たとえ変化があったにしても、有害な方向ではなく、健全な方向へ進むものである」⁴²⁾。したがってマキャベリがいう歴史は、人間的自然を起成因とし神を規定因として一定の循環をなすものとみなされる。それゆえに人間の生存の時間的限定は言うに及ばず、政治社会においても秩序の形成から力、無為そして無秩序から混乱を経て再び秩序の形成に復帰し⁴³⁾、政治制度も、また君主制から貴族制を経て共和制へ、そして共和制下のアナーキーを経て君主制へと復帰してゆくものとみることができたのである⁴⁴⁾。

歴史がこうして絶対的規定としての神的規定によって循環するものとすれば、歴史的な経過

は、いわば一種の円環を描くのであり、この経過においては、始は終であり、終は始であり、この経過に断絶はありえない。歴史は、同一の円環を辿って経過するのみである。

歴史の経過を循環とみなすならば、この経過に関して一定の法則を認めることは容易である。経過をひき起す原因が人間的自然にあるとすれば、この原因から生ずる諸結果が、歴史的事実の諸様相であり、同時にこの原因の展開過程が、歴史の経過であるから。換言すれば歴史の経過は、一個の因果連関を形成するであろう。

人間の欲望とその実現能力との差が、対立や敵対をひき起したように、都市や国家もまた、この自然によって規定される。したがって都市や国家、人間の諸現象を生起する諸原因は、時間の経過にそって展開した諸原因の結果であるとみなすことができる。それゆえマキャベリは、しばしば、結果と原因との連関を、政治家の諸行動のうちに読みとることができたのである。

マキャベリにとって歴史が、自然的過程であり、不断に循環するものとみられるから、この繰り返しのうちに一個の法則性を見いだすことができたのであった。歴史の経過が循環するものであれば、過去に生成した諸事実は、現在と未来とにおいて生起するそれと同一視することができよう。したがって現在において生起しつつある諸事実は、過去において生じたと考えることを可能ならしめる。したがって当面する問題とそれへの対応とは、過去においても存在したのであるから、過去の諸行為は、現在とすべきその先例となり、模範となることができたのである。

以上がマキャベリの歴史観の特徴であるが、この歴史観は、なによりもまず、人間的自然の自然主義的把握に由来する⁴⁵⁾。したがってこの史観は、歴史の自然主義的把握と理解⁴⁶⁾されたのであった。この史観は、それゆえに進歩や発展と歴史をみるものとは、全く無縁であるとデ

42) *Discourses*, III, 1, p. 419. これに関連してマキャベリは政体の循環について言及している。Cf., *ibid.*, II, 2, pp. 197-199. しかしマキャベリは「同じ出発点にもどっている例はきわめて稀である」という。「それはどの国家にしてもなんでもこのような循環を繰り返して、それでいてなお自立できるという余力を残しているほどの活力をもつことなどは、無理なことであるから」。*Ibid.*, p. 199.

43) *History*, V, 1, p. 1232.

44) *Discourses*, I, 2, pp. 195-198.

45) Sternberg, *a. a. O.*, S. 56.

46) K. Vorländer, *Geschichte der Philosophie*, 7. Aufl., 1927, Bd. 2, I, 6, S. 52.

ルタイは指摘したのであった⁴⁷⁾。この史観にふくまれる観点は、カッシラーによれば、静態学的といわれる。この観点によれば、「歴史的事件は、いっさいが共通性をもつ。それらは、形而上学的には時間的空間的に一定の限定的立場をもつにせよ、その意義と性質とは、不変のままである」⁴⁸⁾。

IV マキャベリと古代及び中世

マキャベリにおける歴史観の特徴として実用的歴史観と循環史観とを指摘して来たが、この歴史観は、マイネッケによれば、18世紀の反カルテジアン・ビコ (Giambattista Vico) もまたその圏内に入る歴史観であり、これは、ポリビウス (Polibius) によって基礎づけられ、マキャベリによって更新された古い循環史観の大規模な復活であったといわれるが⁴⁹⁾、しかしマキャベリの歴史観は、古代のその復活ではあっても、単なる復活ではありえない。興隆と不可避的衰亡との反覆的な連続が諸国家の運命であると考えるにせよ、この運命への追従がマキャベリの立場ではなく、この運命を操るとみなすのが、マキャベリの実用的歴史観の基底をなすのであるから。マキャベリの歴史観の古代のそれとの関係については、しばしば指摘されているが、ギリシアの歴史観よりは、ローマの歴史観の影響が指摘される。

記すまでもなく古代復興というマキャベリが生きた時代の精神からみれば、彼もこの時代精神の圏内にあり、それゆえ彼の歴史観も、一面において古典古代の歴史観との関連をもっている。事実『ローマ史論』は、リビウスのローマ史にもとづく論考という題名を付されているし、「古代無視」と「古代趣味」という同時代の古典に対する精神的態度を批判しながら、他面においては、それらに対置して、古代の国王、軍人、市民、立法者そのほか祖国のために貢身的に活動した人物の行為を手本にすることを明

言している。そして『ローマ史論』はいうに及ばず、『君主論』もまた、古代のこの意味での実例をもって埋められており、古代ローマの諸事件をこれらの著書を構成する大半の素材としたのであったことはすでにみて来たところである。これらの素材を採りあげ、これについて論及する場合、マキャベリが依存するのは、リビウスは当然であるが、ポリビウス、タキトゥス (Tacitus) というローマの歴史家の著述である。リビウスの書物は、しばしば、明記することなく引用されたり、要約してマキャベリ自身の見解とされたり、リビウス自身の見解にそって自説を展開したりするために用いられている。たとえば『ローマ史論』第2巻23章及び24章、同巻28章から33章に在る各章は、リビウスの書物からの引用とリビウスの書物にみられる一般命題や事実の解釈によって構成されているといっても決して過言ではない。タキトゥスやポリビウスの書物は、リビウスの書物ほどには使用されていないにせよ、ほとんど明示することなく、引用したり、自説としたり、採用する諸事実の典拠としているのである⁵⁰⁾。しかしながらリビウスその他からのこれらの引用や利用が目指しているのは、その単なる模倣でもなければ、そこに含まれる諸命題の援用でもなく、まさにダンニングが言うように「原則を発見するというよりはむしろ自己の原則の展開である」⁵¹⁾。そしてこの場合でもやはり、デルタイが指摘しているように重要であるのは、ポリビウスである。デルタイの指摘によれば、ポリビウスに依存する⁵²⁾リビウスは、

50) Tacitus については Prince, 13, p. 54, *Discourses*, I, 29, p. 257. Tukidetes については *Discourses*, III, 16, p. 468.

51) Dunning, op. cit., p. 293.

52) デルタイは、マキャベリの宗教観が、ポリビウスのそれと一致すると論じながら、「ポリビウスを法王ニコラウスの命令によって人文主義者ペロッチが浅薄なやり方で、しかし優雅な文章で翻訳しておいたので、1473年には、なおギリシャ語の原典に先立つこの翻訳が、印刷されていた。この翻訳は、はじめの5冊だけしか訳されなかったで、マキャベリがそれしかしなかったかどうかはわれわれにはわからない。」と言いつつも「ポリビウスがマキャベリに最も強い影響を与えた」という。ポリビウスの政治理論、歴史観、法及び宗教観に、マ

47) Dilthey, a. a. O., S. 30.

48) Cassirer, op. cit., p. 125.

49) F. Meinecke, *Die Entstehung des Historismus*. 菊盛・麻生訳『歴史主義の成立』上, 138頁, 55頁.

ポリビウスによって集約され、ローマに伝えられた歴史観のヘレニズムの伝統の唯一の独創的な発展をなした歴史家である⁵³⁾。デルタイは、これらの歴史家のうち「いかなる場合にもマキャベリに対して、これ以上に強い影響を与えた著述家はない」としてポリビウスの名を断定的にあげている⁵⁴⁾。

ポリビウスはストア哲学の形成期ヘレニズムの時代の歴史家であり、本質的にギリシア精神によって影響されている。本来、ギリシア精神にとって世界は、コスモスであり秩序であり、地上の世界が、可變的で流転するのに対して不変的恒常的な世界であり、永遠のものとみなされた。この世界観においては、常に在るもの、変わらぬものが求められたし、求めるに値するものである⁵⁵⁾のに対して、歴史すなわち生成し消滅するもの、流転するもの、真に存在しないものは、不可知であり、結局知るに値しないもの⁵⁶⁾であった。プラトンは、歴史に対して関心を示さなかったし、彼よりは世俗的関心をもち、リアリストであったアリストテレスは、歴史的事例を收拾し、諸制度の構成や機能に関

心をもったが、しかし、彼にとっても、繰り返すもの、恒常的なもの、法則的なものが問題であった。このことはギリシア古典古代最高の歴史家ツキデテスにおいても同様である⁵⁷⁾。ギリシア精神のこの一般的な傾向は、歴史観の成長に好ましいものではなかった。この一般的な思想傾向によれば、歴史は、人間に固有の活動領域に属するものとは考えられない。歴史は、なにも特別な、あるいはとりわけ目立った領域の事からを意味するのではなくして、なによりもまず「探究すること、知ること、覚えていること、そして歴史家が探究しえたことを物語り、あるいは報告することを意味する」⁵⁸⁾。ツキデテスにおける歴史は政治史であり、人間の政治的営為、戦争と革命、国家、党派、階級間の戦い、勢力均衡やヘゲモニーのための闘争であり、政治に及ぼす経済的利害の影響、陸軍、海軍などについて深い洞察を示しているのであるが、しかし彼の求めるものは、恒常的なもの、常に繰り返すものであり、これは、人間の本性の本質的な不変性⁵⁹⁾に依存する。

個人は、ある一定の状況のもとでは、より賢明に行動するかもしれないが、歴史そのものは本質的には変ることがない。したがって歴史の研究は、人生とはどのようなものであるのかを教える点に価値があることとされ、歴史家は、未来に対して教訓を与えることができる⁶⁰⁾。それゆえ歴史は、後世が出合うかもしれない歴史に対してよりよい準備ができるための「物語」である⁶¹⁾。プルトマンによればギリシアの歴史観は、「歴史を自然との類比において考えること」であった⁶²⁾。

ローマの歴史観もギリシアのそれと根本的に

マキャベリは全く追従しており、「法、および道德の起源にかんするポリビウスのこのような理論からマキャベリは、僅かではあるが一定の意図をもってなされた乖離を伴いつつ採擷した」と指摘する。デルタイは、とくにマキャベリの『ローマ史論』1巻2章の国家、法および道德の起源は、ポリビウスのそれからの援用であるといっている。Dilthey, *a. a. O.*, S. 28.

ダンニングも、「マキャベリは、政府の起源および範囲と社会諸制度の基礎にかんしては、全くポリビウスの理論を採用している」と指摘している。Cf. Dunning, *op. cit.*, p. 305.

53) R. G. Collingwood, *The Idea of History*, Oxford Paperbacks, 1963, p. 36.

54) Collingwood, *ibid.*, p. 49. Dilthey, *a. a. O.*, S. 28. H. Myer, *Abendlandische Weltanschauung*, Bd. IV, S. 77.

55) K. Löwith, *Welt und Weltgeschichte*. 柴田訳『世界と世界史』93～94頁。Myer, *ibid.*, Bd. I, S. 294-295.

56) Collingwood, *op. cit.*, p. 20. *Der Sinn der Geschichte Sieben Essays von Golo Mann, Karl Löwith, Rudolf Bultmann, Theodor Lütke, Arnord J. Toynbee, Karl R. Popper, Hans Urs von Baltasar*, Herausgegeben von Leonhard Reinisch, München, 1961. ライニッシュ編 田中元訳『歴史とはなにか——歴史の意味——』Golo Mann『歴史哲学の根本問題』14頁。

57) Collingwood, *ibid.*, p. 21. Mann, 同上訳書, 同頁。

58) Collingwood, *ibid.*, p. 21. Löwith, 前掲訳書, 95頁。

59) Löwith, 同上訳書, 95～96頁。

60) Rudolf Bultmann「ギリシャおよびキリスト教における歴史の解釈」ライニッシュ編, 前掲訳書, 69頁。Löwith, 前掲訳書, 97頁。

61) Golo Mann, 前掲訳書, 16頁。

62) Collingwood, *op. cit.*, pp. 40-42. Bultmann, 前掲訳書, 70頁。

は異ならない。ギリシア出身のローマ人ポリビウス、あるいはキケロ、リビウス、タキトゥスなどのような歴史家、政治家は激動の時代に生きていたが、彼らにとって変化とは、まずもって危険に晒されていることであり、墮落であり、悪であった。黄金の時代は過去のものである。そしてこの時代に帰ること、すなわち父祖の習俗および究極的に正しい父祖の諸制度を回復し維持することが、政治家ならびに歴史家の本来的な使命であると考えられた。したがって彼らははなはだ保守的な思想家であった⁶³⁾。歴史の本質としての変化は嘆かすべきもの墮落したものではなく、希望や進歩がそれに結びついているかもしれぬということ、こういう思想は、ローマ人たちには根本的に疎遠であった⁶⁴⁾。ポリビウスだけは、すべての出来事を、ローマの世界支配という一定の目標に向かうかのように叙述して近代の歴史観に近づいたかのように思われる⁶⁵⁾。

しかしポリビウスは、歴史家にとって重要なのは、医師が病患を重視するのと同じように、政治的経過の原因と目標との研究を、とりわけ政治変動の原因として変容した体制の病患を発見することであったが、それ以上に重要なのは、国家形態の自然法則的経過を発見することであると言う。ポリビウスにとって国家形態の循環は、自然の秩序である⁶⁶⁾。かくしてポリビウスにとって歴史は、政治的転変の循環のように経過する⁶⁷⁾。諸国家は、ローマ国家のように交替し消滅し、自然によって予定された循環の法則に服するものである⁶⁸⁾。生起のこのような自然的宿命に基づいて、歴史家は、一定の政治状態

の未来を予見することができる⁶⁹⁾。ギリシア精神を支配した反歴史的傾向に同調して、生成変化に関する科学はありえず、歴史の価値は、理論科学的価値ではなく、実際の価値にすぎない。ポリビウスにとって歴史が研究に価いするのは、歴史が科学的に真実であり、証明可能であるからではなく、政治生活のための練習場であるからである⁷⁰⁾。しかしポリビウスは、歴史研究によって人間が先人の誤りを避け、先人を凌ぐ成功を取めることができるとは考えない。彼にとって歴史研究がもたらすことのできるものは内的成功であり、外界ではなくして自我に対する勝利である。われわれが、歴史上の英雄の悲劇から学ぶものは、われわれの生活にあって同様な悲劇を避けることではなく、運命が悲劇をもたらすときに、それに雄々しく堪えることである。コーリングウッドによればこのような歴史観においては、運命の観念が極めて重視され、「歴史に決定論 (determinism) の新しい要素を導入する」⁷¹⁾のである。こうして、ストア学派やエピクロス学派が論理学に適用したと同じ考え方をポリビウスは、歴史に適用するのである⁷²⁾。

ポリビウスの歴史観のヘレニズム的伝統はローマへ移され、ローマではリビウスが、唯一の独創的發展を示すのであるが^{73, 74)}、ただリビウスは、ポリビウスほどではなかったが、ローマの歴史家の誰よりもはるかに哲学的であり、モラリストであった⁷⁵⁾から、過去の歴史から学ぶべきだという思想が強くあらわれる。歴史はいわば倫理の教科書であり、そこから人は、人間生活の中に働いている道徳法則を知る。歴

63) Golo Mann, 前掲訳書, 18頁. Myer, *a. a. O.*, Bd. I, S. 346-350.

64) Collingwood, *op. cit.*, p. 12. 「ヘロドトスもツキデテスもギリシア思想の現実から離れた異様な現象とみなされた」。Golo Mann, 同上訳書, 19~20頁.

65) Löwith, 前掲訳書, 101頁.

66) G. Möbus, *Die Politischen Theorien von der Antike bis zur Renaissance Politische Theorien*, Teil I, 2 Aufl., 1964, S. 64.

67) Möbus, *ibid.*, S. 68.

68) Möbus, *ibid.*, S. 164.

69) Löwith, 前掲訳書, 101頁.

70) Collingwood, *op. cit.*, p. 35.

71) Collingwood, *ibid.*, p. 36.

72) Collingwood, *ibid.*, pp. 36-37.

73) Collingwood, *ibid.*, p. 36.

74) リビウスの著述全体が切り貼り方式 (scissors and paste means) で構成される。リビウスの仕事は初期ローマ史の伝統的記録を収集し、これを合わせて、ローマ史という1つの継続的史話を作ること尽きた、とコーリングウッドはいう。Ibid., p. 37.

75) Collingwood, *ibid.*, p. 37.

史家は悪徳を警戒せよと忠告し、徳に向って教育しようとするのである⁷⁶⁾。

マキャベリは、キリスト教に対し鋭い批判を展開しているが、その批判は、自由愛を失ってしまった⁷⁷⁾当時の人間の弱さをもたらしした点に集中される。彼は古代ローマの宗教と当時の宗教とを対比して、古代のそれがなによりもまず世俗的なものであり、現世の榮譽を最高善とみなし、將軍その他の偉人を称えたのであった。それゆえにこの宗教は、「強靱な精神、頑健な肉体その他人間をこのうえなく強い存在に鍛えあげるものすべてを最高善とした」⁷⁸⁾のに対し、「現代の宗教は、真理と正しい生活方法を啓示するから非世俗的であり、なによりもまず忍従を説く」⁷⁹⁾のである。それゆえに世の中はますます虚弱となり、極悪非道な輩の好飼にならざるをえない⁸⁰⁾。なによりもまずキリスト教の歴史観においては人間の存在と活動とは、神の摂理であり、この摂理史観においては、人間の意欲は否定すべきものとみなされたのであった。マキャベリは、彼の宗教観に基づいてキリスト教に対する仮借なき批判を展開して⁸¹⁾、啓蒙主義期における宗教批判の先駆となったからこれによって中世的キリスト教的歴史観と決定的に対立するものとなる。

コーリングウッドによれば、キリスト教の歴史観は、「神の御業の物語」⁸²⁾である。キリスト教によれば世界は、全知全能の創造主たる神の被造物とみなされ、自然の世界は、神の巧み⁸³⁾となり、人間の世界は、神の創造によるものとしては善そのものであるが、原罪を契機として、諸悪に満ちた世界となる。こうして世界は、神の国と地の国とに分裂したのであった。地上の世界は、神の被造物としてそれ自体、悪ではあ

りえず、善である⁸⁴⁾が、しかし原罪によって神への愛を見失い自己愛や世俗的愛に傾き⁸⁵⁾、これによって諸対立と敵対そして諸悪の世界へと転落した⁸⁶⁾のである。神の創造と世界の転落ならびに最後の審判と復活というキリスト教の教義によって、歴史は、古代における歴史の意味とは異なった内容を付与されるにいたる。

キリスト教の教義によれば、歴史の経過は、世界の神的な始まりと神的な終りをもつもの、創造と墮罪ならびに最後の審判と復活を両端とするものとみなされ、かつ一回限りのものとみなされる⁸⁷⁾。ここにみられる歴史の経過は、古代のそれのように自然のうちにあるもの、天体の運行にみられるような自然的なものの特徴としての無時間性、無限性を特徴とするのではなく、終始をもつもの、有限的なものとみなされる。それはまた終始の一致を特徴とする循環とは異質なものである。これに加えてこの歴史の経過は、始源から終末への直線的な進行ではなく、この経過のうちにキリストの出現という事件が介入して、これを境として、前後に分断され⁸⁸⁾、過去は、古代におけるように不断の源泉として現在化されるのではなく、未来の約束となり、かつ未来の意味深い準備⁸⁹⁾とみなされる。かくしてこの経過は、創造と墮落ならびに審判と救済とを画期とする断続的経過となり、これらの出来事が、歴史の経過を区分し、それぞれの区分が特殊性をもち、前後のものと截然と区別される時代ないしは画期 (epoch or periods)⁹⁰⁾をもつものとなる。こうして歴史の経過は、三つの画期をもつものとなった⁹¹⁾のであった。

この歴史の経過の段階的区別とともに、この

76) Bultmann, 前掲訳書, 71頁.

77) *Discourses*, II, 2, p. 329, p. 311.

78, 79) *Ibid.*, p. 331.

80) *Cf.*, I, 11-12, pp. 223-229.

81) F. Jodel, *Geschichte der Ethik als philosophischer Wissenschaft*, Bd. 1, „Bis zum Schlusse des Zeitalters der Aufklärung,“ Darmstadt, 1965, S. 169.

82) Collingwood, *op. cit.*, p. 53.

83) Löwith, 前掲訳書, 7頁.

84) St. Augustines, *City of god*, by J. W. C. Wand, II, 11, xxiii.

85) *Ibid.*, II, 13, xiv.

86) *Ibid.*, II, 14, i.

87) W. Windelband, *Lehrbuch der Geschichte der philosophie*, 10 Aufl. Tübingen, 1921, S. 210.

88) Bultmann, 前掲訳書, 78頁.

89) Löwith, 前掲訳書, 99頁.

90) Collingwood, *op. cit.*, p. 50.

91) Windelband, *a. a. O.*, S. 216.

歴史観は、目的論的特徴をもつ。キリスト教の教義によれば、世俗の世界は、自己愛に由来する諸悪徳に満ちた世界であった。この世は、悲しみの世界であり、仮の住み家にほかならない。それゆえ世界の歴史は、「救済生起と最初の啓示と未来におけるその表現との間の当座のこと (interium) にすぎない」⁹²⁾ が、しかし超世俗の始源と超世俗の終末との超時間的な連関によってのみ、歴史は、全体として明確な意味をもつにいたる⁹³⁾。すなわち、この世界は、信仰と不信仰、徳と悪徳との闘争場であり⁹⁴⁾、人間と人間との、神と人間との関係が展開される場である。この世界においては、いっさいは神の世界創造に伴う神的意図の表現であり、神の摂理であるから、歴史の経過は、人間による神的意図の達成過程以外のなにものでもありえない。ここではこの神の意図は、人間の意志を媒介として、人間生活のうちに具体化されるのであるが、しかしながら人間のこの意志は、神的意図の実現のためにあるもの以外のなにものでもありえない。一面においては、歴史的出来事は、人間を目的として生起するのであるとみられるが⁹⁵⁾、しかし他の面においては、あくまでも神の意図を達成させるための手段でしかない。

かくて中世の歴史記述にとっては、世界史は神によって規定された終末論的目標に至る救済の歴史にほかならない。それゆえ中世における歴史観においては、自然の目的論に対して歴史の目的論が優位し⁹⁶⁾、歴史の考察は、因果連関を追求するものではなく、歴史の経過を目標に向って努力する経過と考える⁹⁷⁾のである。

中世期キリスト教の歴史観は、キリスト教の普遍性に由来する世界史の概念を帰結した。キリスト教思想にとってすべての人間は、神の創造したものとして平等であり、それゆえ古代イスラエル思想における選民思想をはじめ、特権

的民族や特権階級、特権的国家、さらには社会内部における特権階級等を、要するに不平等を認容しない。歴史の経過は、この平等なものの歴史であって個々の歴史の経過は、全体としての歴史の経過の一部を構成するものとみなされる。すなわちキリスト教の求める歴史は、ローマの歴史やユダヤの歴史その他いかなる「偏頗な排他的な歴史ではなく、人間全体に対する神の諸々の意図の総体的発展を主題とする普遍的歴史 (universal history)」⁹⁸⁾にほかならない。

これらの特徴を内容とする歴史観によれば、神の意図こそ歴史の絶対的かつ超越的な前提であり、歴史は、神の意図そのものであって、人間の意志に全くかかわらない。歴史を形成する人間の活動は、神の意図によって捉えられ、人間の意欲と活動とはこの神的な意図に従って推移する歴史の終末を決定している目的の促進と実現とのための単なる手段にほかならない。かかる歴史の経過はそのうちに人間的意欲と活動との介入する余地を残すものではない。残るただ1つの可能性は、「自己が確実に断罪をうけ、挫折して自己の人格を無に帰することのみである」⁹⁹⁾。かくて中世の歴史観においては、神の意図こそ客観的實在であるとみなされ、人間の主観的意図を超越して、これを絶対的に規定するものとみなされる。

中世キリスト教の歴史観が歴史の一回性、歴史の段階規定そして歴史の世界性という重要な観念を斉し、かくして歴史主義の成立に重要な示唆を支えたとはいえ、この歴史観のもとにあっては、人間の活動そのものは、全く背景に押しやられる。「神の客観的意図は、人間の主観的意図と全く対立する。人間の主観的意図とは全く無関係に神の意図が歴史に課せられる」¹⁰⁰⁾。歴史を促進するのは人間の活動ではなく歴史の経過を決定する唯一の力は、神以外のなにものでもない。かくてこの歴史観のもとにあっては、

92) Löwith, 前掲訳書, 105頁.

93) Löwith, 同上書, 104頁.

94) Windelband, *a. a. O.*, S. 214-215.

95) Collingwood, *op. cit.*, p. 48.

96) Windelband, *a. a. O.*, S. 219

97) Bultmann, 前掲訳書, 78頁.

98) Collingwood, *op. cit.*, p. 49. Vgl. Windelband, *a. a. O.*, S. 219.

99) Collingwood, *ibid.*, p. 53.

100) Collingwood, *ibid.*, p. 55.

人間の意欲と活動とは、歴史の経過に対して全く無力なものとみられたのである。それゆえにマキャベリの歴史観は、人間を虚弱化した宗教に対する仮借なき批判に基づき、中世の摂理史観からの脱却であるばかりかそれとの対決を意味したのであった。繰り返すまでもなくマキャベリにとって歴史は、人間的自然に由来した。そしてこの歴史を実用化するものとは、強力な能力（ビルトー）をもつ人間である。この自然によって歴史は形成される。したがって神によって人間とは無関係に課せられた神の意志は、不可抗のもの、不可避のものとして消極的に忍従すべきものとはみられず、かえって法則として認識可能であり、それゆえにこの認識に基づいて操作可能なものとみなされ、実践のために有益なものとみなされる。かくして神の摂理は背後に押しやられるか全く排除されてしまうとまで言われえたのである¹⁰¹⁾。

V マキャベリと人文主義の歴史観

キリスト教の歴史観に対してマキャベリとまたそれに属する人文主義の歴史観は、キリスト教的歴史観に対する批判であり、これを共通の基盤としながらも、古代の歴史観のたんなる復活ではない。この復活は、人文主義に固有の「世界と個我との発見」に基づくものであって、その中心は、現実に生き、生活する人間そのものの活動を基盤とした復活である。マキャベリの歴史観は、この主流の直接的系統に連なるものであった。

ビラリによれば、マキャベリが一連の歴史著述を始めたころ、フィレンツェには二つの歴史学派が存在した。一つは、ジョバンニ・ビラニ (Giovanni Virani) に従う編年史家の一派であり、ジーノ・カッポーニ (Gino Capponi) の編年史やピアジョ・ブオロナコルスィ (Biagio Buronaccorsi) の日記がこの派の成果であったが、彼等は、多数の年代記や年鑑や、フィレンツェの政治事情を年次的に記録した文書、その他日記の類を多く書き、日常的な事件を克明に

記録した。これらは、莫大な資料を蓄積したが、文学的価値を認められず、しだいに主流としての位置を失いつつあった。

第二のものは、前者の傾向に満足できなかった人文主義の学派であり、この学派の代表は、レオナルド・アレッティあるいは、ブルーニ (Leonard Aretino, or Bruni)¹⁰²⁾ やポッジョ・ブラッチョリーニ (Poggio Bracciolini) であるが、彼等は、リビウス等の古典的歴史書をモデルにして、歴史を書いた。この派が前者を圧倒して史学界を支配していたのである。この学派も編年史派の手法を採り入れることに心がけると同時にマキャベリが見たように「古代軽視」の傾向を示し、歴史よりはむしろ「修辞や技巧を強調する」¹⁰³⁾ 歴史文学に脱しつつあったし、ましてそれぞれの時代に帰属する諸事実の論理的関連を、意識的自覚的に究明するということを問題にすることはしなかった。マキャベリは『フィレンツェ史』の序文でブルーニとポッジョの歴史に言及し、彼が歴史書を書くにあたってそれらを参考にしようとしたが、これらのすぐれた歴史家が以前の時代について残らず記しておいたものと思っていたのに、彼等は「フィレンツェ人が外国の君主と人民に対して行った戦争については、なにひとつ見過すことではないのであるが、民衆間の確執や内紛、そしてそこから生じて来る多種多様な感情に関係する党派については話していないし、その他のことがらあまり急いで話を進めている」と記している。マキャベリによれば、国内の諸事件こそ記述に価いするのであり、とりわけ党派の争いがそうである。これこそは、「わが都市の発らつたる生活力をみせてくれるものであり、…中略…わが都市は、それによって新しい活力を与えられたのである」¹⁰⁴⁾。

編年史家にあきたらず、そうかといって当時の人文主義の歴史書にもまた批判的であったマ

102) P. Villari. (trans. by Mam L. Villari) *The Life and Times Niccolo Machiavelli*, a new edition, 2 vols., 1927, I, pp. 94-95.

103) Villari, *ibid*, II, pp. 404, 406.

104) *History*, pref., p. 1031.

101) Myer, *a.a.O.*, Bd. IV, S. 80.

キャベリは、ペトラルカ以来定着した人文主義の歴史論を自覚的に推進したのである。

ところでマキャベリが批判するブルーニは、15世紀初期のフィレンツェ人文主義を代表するのであるが、彼は、14世紀人文主義を代表するサルターティ (Coluccio Salutati) の弟子である。サルターティは、ペトラルカの弟子であり、彼の賛美者でもあった¹⁰⁵⁾。同時に彼は、フィレンツェ市庁の書記であり、政治家として活躍し、その意味でマキャベリ等のフィレンツェ市庁書記の先輩格である¹⁰⁶⁾。ペトラルカ、サルターティそしてブルーニという人文主義の始祖と各世紀を代表するこれら3人の歴史観は、マキャベリの歴史観形成に重要な前提をなすものであった。

14世紀フィレンツェ市の抬頭とそれを背景としたローマ教皇庁からの解放と独立とを反映して、これらの人文主義者は、言うまでもないが古典研究家であると同時に、当初から現実政治に対する強い関心を示し¹⁰⁷⁾、これが彼等の歴史観に少なからざる影響を及ぼした。

ペトラルカは、広汎な古典研究によって人文主義の父とされるが、彼の古典研究は、主としてラテン語を通して行われた。歴史にかんする限り、アビニヨン滞在の時期に、古典研究の一端としてリビウスの『ローマ建国史』(*Ad Urbe Condita Libri*) の編集に従事し¹⁰⁸⁾、これは以降、識者からその完成を待たれるものとなった¹⁰⁹⁾。リビウスのローマ史は、『有名人伝』(*De Viris Illustribus*) や『アフリカ』執筆の際に素材として使用されたし¹¹⁰⁾、『書簡集』に

は、キケロ、セネカ、ホラティウスあての書簡とともにリビウスあてのそれも収められている¹¹¹⁾。彼が宮廷や識者の集会で行ったスピーチの中でも、リビウスの言葉が引用されている¹¹²⁾。ペトラルカは、「リビウスの歴史が、現在と将来とにとって良い実例を示すであろう」と言ったが、このリビウス評価は、後代の歴史家に示唆を与えるものであった。

こうして幼年時代からの古典研究によって成立したペトラルカの歴史観には、二つの特徴が認められる。まず第一に、彼の『有名人伝』の序文において、この書物を成立せしめた素材の選択基準を示し、それらは、徳か悪徳かを説明するためのものであるという。彼にとって歴史家の「最後の所産とは、読者が従うべきかあるいは避けるべきものを提供すること」¹¹³⁾にほかならない。彼は、歴史を道徳的判断のためにそして道徳的改善のために叙述することをはっきりと示している。そして『記録集』は、人々に人生における良き実例を示すために書かれた。彼の道徳的判断の基準は、キケロ的伝統に立つ道徳規範であった¹¹⁴⁾。ペトラルカにとって歴史は、こうして「神の御業」を物語るものではなく、この世に生活する人間に対して道徳的実例を提供するものであり、まさに「実例によって教える哲学」¹¹⁵⁾にほかならない。それゆえこの歴史観においては、「古代的徳の人間化、世俗的人間生活の社会化が、啓示的用語やスタイル

110) H. O. Tylor, *Thought and Expression in the Sixteenth Century*, 2 vols., I, p. 17. Wilkins, 同上訳書, 36頁.

111) Wilkins, 同上訳書, 59~60頁, 100頁.

112) Wilkins, 同上書, 156頁.

113) Taylor, I, p. 17.

114) 『快樂処理法』は、重要な徳目にかんする論文であるが未完である。Wilkins, 同上訳書, 44, 50頁。ストア哲学に基づくペトラルカの道徳論発表以来、一群のストア的人生論や道徳論が続出した。P. O. Kristeller, *Renaissance Thought II Papers on Humanism and the Arts*, p. 20 ff. Dilthey, a. a. O., S. 23. H. A. van Gelder, *The Two Reformations in the Sixteenth Century*, pp. 13-14. 清水純一「ルネッサンス期の哲学」『講座 哲学体系 2』183頁。速水敬二『ルネッサンス期の哲学』39-40頁。

115) 永井三明「ルネッサンス期の歴史思想」『講座 哲学体系 4』78頁。

105) Villari, op. cit., I, p. 79.

106) Salutatiの晩年から、フィレンツェ市庁は、人文主義者を書記として採用しはじめた。Salutati, Marcello Virgilio, Machiavelli, Gianotti, L. Bruni, Carlo Marusppini, Poggio Bracciolini, Bartolommeo Scala, Adrian などが採用されている。Villari, ibid., I, p. 81.

107) J. G. A. Pocock, *The Machiavelian Moment Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*, 1975, pp. 59-60.

108) E. H. Wilkins, *Life of Petrarch*, 1961. 渡辺訳『ペトラルカの生涯』12.

109) ペトラルカがリビウスの『ローマ史』の発見者である。同上訳書, 25頁。

の介入を許さぬ」といわれるのである¹¹⁶⁾。

第二に、彼の文献学的研究に関連して、古典の諸作品を再生しようとする態度によって、歴史を「物語」として文学とみなす態度が克服され、諸文献の厳密な客観的吟味を行う道が開かれたのであった¹¹⁷⁾。ペトラルカによって示された歴史に対する見解は、彼以降の歴史観に、多かれ少なかれ影響を与えたのである。

ペトラルカの弟子であったサルターティは、ペトラルカあての書簡でフランスの政治について報告しているが¹¹⁸⁾、彼は、フィレンツェ市のローマ教皇庁に対する独立闘争期を代表する政治家である¹¹⁹⁾。彼は、古代ローマの再興を政治目標とし、彼の著述は、この抗争期において「数千の騎士の力」以上に、古代ローマの記憶をよび起す力をもっていたといわれる¹²⁰⁾。彼は、自由の名において教会に屈従している諸地方に向って解放と独立とを訴えたのであった。古代ローマの理念は、ダンテやマルシリオにその先駆をもつものであったが、サボナローラの革命に先立つコーラ (Cola) の独立運動においても強く採りあげられ、ペトラルカもまた重大な関心を示したところであった。ペトラルカもまた頽廢したイタリアの現実に対して古代ローマの復興をねがい、コーラの目標に強い支持をあたえたのであった¹²¹⁾。サルターティにとっては、彼の『運命論』(De Fate)において表明された以上の国が、この理念の現実化の担い手であった。

彼の古典に対する知識は、ペトラルカと同様、主としてラテン語を通じてのキケロ、セネカ等のストア哲学の修得によっていた¹²²⁾。この知識を政治に利用しようとしたが、この点に関連して彼の政治家に対する提言は、人文主義のうち

に定着しつつあった思考の方法と対象を示すものとして注目に価いする。『運命論』において展開しているように、彼の主たる関心は、人間そのものであるが¹²³⁾、ビラリによれば、サルターティは、政治家に対しても、「旧来の偏見や伝統的慣用語にとらわれることなく、事件を自然の観点から取り扱い、人間の情念 (passions) そのものの研究によって、これを政治に用いる」ことをしばしば、提言した¹²⁴⁾。人間的情念 (自然) を研究するように提言するサルターティのこの提言の内容は、コーリングウッドが記したルネッサンス期の歴史観の特徴である。コーリングウッドは「ルネッサンスの歴史家にとって、人間は古代哲学が説く人間、自己の行為を制御し、知性の働きによって運命を創造するものではなく、キリスト教思想が説く人間、つまり情念的な衝動的な神の被造物であった。そして人間の情念は、人間性の必然的表白と考えられ、かくて、歴史は人間の情念の歴史になる」¹²⁵⁾と述べたが、サルターティのこの提言は、人文主義の歴史観の重要な一面を示唆するものであった。

サルターティにみられるこの自由への関心と人間的自然の研究の重視とならんで、マキャベリが批判した古代軽視の傾向も現われる。「歴史における修辭的傾向の増加」もまた出現する。すなわち政治的関心によって歴史が書かれるために、歴史的事実の客観性に対する関心よりはむしろある政治目的を促進するために、能弁と理屈と精巧さとが用いられたばかりか濫用されることになったのである¹²⁶⁾。

ブルーニもポッジョとともにサルターティの弟子であり、15世紀初期人文主義の指導者であって¹²⁷⁾、イタリア人文主義の第二期¹²⁸⁾を代表

116) Pocock, op. cit., p. 51.

117) Tylor, op. cit., I. p. 7.

118) Willkins, 前掲訳書, 98頁.

119) Tylor, op. cit., I, p. 30.

120) Villari, op. cit., I, pp. 80-81.

121) Willkins, 前掲訳書, 57頁. Pocock, op. cit., p. 60. 清水純一, 前掲論文, 183-184頁.

122) Tylor, op. cit., I, p. 30. Van Gelder, op. cit., pp. 14-15. F. Gillbert, *Machiavelli and Guicciardini Politics and History in Sixteenth-Century Florence*, paper backs, 1973, p. 91.

123) 清水, 前掲論文, 183頁. 永井, 前掲論文, 88頁.

124) Villari, op. cit., I, p. 81.

125) Collingwood, op. cit., p. 57.

126) Villari, op. cit., I, p. 81.

127) この教養は、主としてギリシア語に基づくものであったので、プラトン、アリストテレス、ポリビウスの著述を知っていた。Tylor, op. cit., I, pp. 36-38. Kristeller は、ブルーニがポリビウスのギリシア語訳にも接している、という。Kristeller, op. cit., p. 85.

128) Villari, op. cit., I. p. 94.

するのであるが、彼はペトラルカに認められた歴史的事実の吟味やサルターティによって示された歴史叙述の目的や方法を受け継いで、『フィレンツェ史』や『イタリア人民の歴史』を書き、ゲルフ党対ギベリン党の抗争史や諸貴族の抗争史そしてそこから出現して来る都市の興隆を叙述の対象とした¹²⁹⁾のであった。

サルターティの教養の基礎と異なってブルーニはギリシア文学を研究し、アリストテレスの翻訳その他で文献学の上で多大の貢献をした¹³⁰⁾が、この古典研究から修得したものを要約して、これを実用化しようとする¹³¹⁾。

ブルーニは、古典研究で用いた文献学的方法を歴史叙述にも用いたが¹³²⁾、これは、時代区分や叙述のスタイルを模倣する「模倣の原則」¹³³⁾であり、この原則に従ってリビウスの採用したローマ都市の叙述に添って、ブルーニ自身もフィレンツェ史の発達を叙述した¹³⁴⁾。これと同時にキケロの示唆に基づく「理由あるいは、原因の原則」¹³⁵⁾がとり入れられ、自覚的意識的でないにせよ、歴史的事実を因果連関のもとにおく叙述が行われた。ブルーニは、中世の歴史観から脱出した¹³⁶⁾。しかしながら古典的歴史書に添った叙述は、時代区分や因果連関をとり入れたばかりか「些細な事件を誇大化し、小

規模な反乱を流血の大闘争にみせかける」がごとき修辭的技巧をも採り入れ、そのために「古代拝跪」とさえみられることになる。それに加えて因果連関による事実の配置は、歴史叙述に統一性を与えるかに見えながら、概して個々の事実の特殊性を失わしめる結果を招いたのであった¹³⁷⁾。

ともあれブルーニの歴史的著述以降、それを契機としてフィレンツェの人文主義的歴史が発達していった。ブルクハルトが記すように、「フィレンツェは、政治の理論、実験と飛躍のふるさととなり、ひとりベネツィアとともに統計術のふるさととなり、そしてただひとり世界の国に先駆けて新しい意味における歴史的叙述の発祥地となった」¹³⁸⁾のである。

マキャベリの歴史的叙述に先立つ以上の概観によってみれば、マキャベリの歴史観が示す二つの特徴は、古代的循環論のたんなる復活ではなく、一面では、人間的自然を原理とする歴史の自然主義的把握という点で共通でありながら、他面では、歴史は、回顧や記念、神の摂理としてではなく、また道徳的教訓としてでもなく、政治の現状を打破するためのもの、換言すれば未来に向うものであったことが判明する。この歴史観は、ペトラルカにおいて認められ、サルターティにおいて明示されたように「自由」への関心によって支えられていたものであり、この意味で、人文主義の直系とみなすことができるであろう。

VI マキャベリの歴史観の展開

—— ボーダン・モンテスキュー ——

マキャベリが最後の著述『フィレンツェ史』の執筆にあたっていたころ、イタリアは、彼の情熱的な統一への希求¹³⁹⁾もむなしく、カール5

129) Villari, *ibid.*, II, p. 96.

130) Bruniの翻訳は多岐にわたる。ソクラテス、プラトンの *Apologia, Phaedo, Krito, Gorgias*, アリストテレスの政治学及び倫理学に関連する著述や修辭学等の翻訳である。とりわけアリストテレスの著述の翻訳は、中世期のそれに比して高く評価されたという。Tylor, *op. cit.*, I, pp. 36-40. Villari, *ibid.*, I, p. 95. Kristeller, *op. cit.*, pp. 41-42. ブルーニもペトラルカ等と同様に道徳論文を書いていることは記すまでもない。

131) Tylor, *op. cit.*, p. 37.

132) Villari, *op. cit.*, I, p. 96.

133) Gillbert, *op. cit.*, pp. 208-209.

134) ギルバートは、歴史記述は、リビウスのそれに従い、このことから古代から学んだ一定の形式が整い始めたという。Gillbert, *ibid.*, p. 210. 歴史は、中世では、神の力を示すためのものであったが、徳の促進と悪徳の阻止とを説くことによって、人間が行使する力を強調し始めることになった、とギルバートは言う。Ibid., p. 218.

135) ギルバートは、ブルーニが、この原則をキケロの *Oratore* から採用した、という。Gilbert, *ibid.*, p. 210. Villari, *op. cit.*, II, p. 404.

136) Pocock, *op. cit.*, p. 52.

137) Villari, *op. cit.*, II, p. 404.

138) J. Bruckhardt, *Die Kultur der Renaissance in Italien*, Stuttgart, 1930, I, 7, p. 139.

139) Prince, 26, p. 96. マキャベリは、ペトラルカのカンツォーネの一節を引用して、イタリア統一の希望を、メディチに託したのである。Cf. *Discourses*, III, 1, p. 418. III, 49, p. 527.

世の侵略によって政治的挫折を経験し¹⁴⁰⁾、カンパネラの『太陽の都』(*Civitas Solis*)は、イタリア統一の希求を示す最後の光芒となったのであった¹⁴¹⁾。同時にイタリアは、反宗教改革運動¹⁴²⁾によって近代の開拓者としての文化的地位をも失うにいたり、以降、ルネッサンスの運動は、ヨーロッパ各地において展開されたのである¹⁴³⁾。

ところでマキャベリは、その政治理論的著述によって、とりわけ『君主論』によって、いわゆるマキャベリズムの始祖とされ、悪の化身とみなされ、非難と中傷とに晒されたのであった¹⁴⁴⁾。しかしながらその反面、少数であるにせよマキャベリを高く評価する思想家も存在したことを見のがしてはならない。例えばベーコンは、マキャベリを近代の開拓者として高く評価した¹⁴⁵⁾。17世紀にいたると、「無神論者」スピノザが、マキャベリを自由の擁護者と理解したが¹⁴⁶⁾、このマキャベリ評価は、ルソーにおいても同様であった¹⁴⁷⁾。

マキャベリに対する非難と中傷そして評価というこの二つの面を、その程度は異なっているも、もった見解を示すのはたとえばマキャベリの同時代人ボーダンと18世紀フランス啓蒙主義の一面を代表するモンテスキューであり、これら両者は、マキャベリの非道徳性を非難しつつも、政治理論および歴史観を評価するという点で共通の特徴をもったのである。

マキャベリと同時代に生き、宗教戦争の渦中においてポリティーク派に属したボーダンは、マキャベリが踏みだした現実主義的な政治理論を樹立した¹⁴⁸⁾と評価されるのであるが、マキャベリと宗教戦争の一当事者となったモナルコマキとを同一視して「叛乱権の擁護者」¹⁴⁹⁾と非難し、彼の反道徳性を強く非難した。彼の政治理論も、マキャベリとは異なった意味においてはあがるが、歴史観の背景をもつものである。彼の『国家論』(*De re publica libri sex*)にもその一部が伺えるのであるが、『歴史の確実な認識方法』(*Methodus ad facilem historiarum cognitionem*)は、彼の政治理論構成の背景を、明らかにするものである¹⁵⁰⁾。

『方法論』におけるボーダンの究極的な目的は、普遍法(universal law)の研究であり、この研究は、たんに法の発見を目的とするばかりか諸知識の獲得を目標にしている。ところで彼も歴史に先例を発見することの重要性を論じている。歴史は変化の過程であるよりは、むしろ一連の繰り返しであり、再発であり、回帰である¹⁵¹⁾。したがって歴史は、適切な事例の源であり、教訓的な物語の性質をもつものとみることが出来る。したがってボーダンは、これら事例

140) G. Mattingly, *International Diplomacy and International Law*, "Cambridge New Modern History," III, p. 150.

141) カンパネラの『太陽の都』は、マサニエロの一揆(1647)、タレツォの一揆、メシーナの叛乱など、スペイン王フェリペ2世のイタリア支配に対する一連の抵抗運動と直結した独立運動の所産であり、この運動が実現しようとした新共和国家建設のプログラムである。『太陽の都』は、ユートピア思想の系譜に入れられるのであるが、このような政治運動と直結している面を見のがしてはならない。Cf. J. O. Hertzler, *The History of Utopian Thought*, pp. 154-155.

142) T. M. Parker, *The Papacy, Catholic Reform, and Christian Missions*, "Cambridge New Modern History," III. W. Allen, *A History of Political Thought in Sixteenth Century*, p. 502.

143) Dilthey, *Gesammelte Schriften*, II, S. 24. H. O. Tylor, *Thought and Expression in the Sixteenth Century*, I, 6, p. 141 ff. Dresden, *Humanism in Renaissance*, 高田訳『ルネッサンス精神史』112頁。

144) E. Cassirer, *The Myth of the State*, X, p. 116 ff.

145) *The Advancement of Learning*, 23.8-23.9.

146) *Tractatus Politicus*, translated by Wernham, p. 125.

147) *Contrat Social*, III, 6. 「マキャベリは祖国の圧制下で自由に対する彼の愛を偽装しなければならなかった」。Vgl. G. Fichte, *Über Machiavelli als Schriftsteller und Stellen aus seinen Schriften*, „Fichtes Werke herausgeben von Immanuel Hermann Fichte“, XI, Berlin, 1971, ein fotomechanischer Nachdruck, S. 401 ff.

148) J. A. Franklin, *Jean Bodin and the Rise of Absolutist Theory*, Cambridge. U. P., 1973, p. 49.

149) *Six Book of the Commonwealth*, translated and selected by M. J. Tooley, II, 1, p. 151. フランクリンは、ボーダンがマキャベリの古代政治家の復活も歓迎した第一者である、と評しているという。Franklin, *ibid.*, p. 49.

150) *Method for the Easy Comprehension of History*, translated by B. Reynolds, ch. 2-3. *Six Book*, V, i, pp. 145-146.

151) *Toalys' introduction to Six Book*, p. xii.

の収集と検討とが、現実政治の解釈を可能ならしめ、永遠の普遍法に依拠すべき政治家の手引きとなることができるのであり、またわれわれに求めたり避けたりすべき事例の判断基準の形成を可能ならしめるのである、と考える¹⁵²⁾。ボーダンもまた、歴史の経過を循環とみなすのであるが、しかしながらこれはマキャベリの場合のように人間的自然の同形性に由来するのではなくして、宇宙の運行過程に内在する諸現象の回帰に由来するものとみたのであった¹⁵³⁾。この「宇宙論的体系 (cosmological system)」¹⁵⁴⁾が、歴史観の背景であり、根拠であった。しかしながらボーダンにとって歴史の研究そのものは、政治的手段の研究に資するものではありえても、政治目的の規定や人間的存在に固有の秩序概念を獲得することを可能ならしめるものではない。真の秩序概念は、永久的自然的秩序であり、一切の行為と制度との基準となりうるもの、すなわち「自然的理性と神の法、聖書に啓示された神の法」¹⁵⁵⁾によって得られるのである。

ボーダンが、歴史を循環するものとみなしそこに法則性を認めようとしているのであるが、この法のうちにある規範性を脱却する方向を明確に示し、歴史のうちに科学的因果法則を認めようとしたのは、ボーダン以降、「大体系の時代を経過した啓蒙主義の時代に生きたモンテスキューであった。

歴史哲学に関連して必ず言及されるボルテールは、『ルイ14世の世紀』(*Le Siècle de Louis XIV*)において、その執筆動機を記し、フランス人がルイ14世の治下になにをしたかを叙述し、この歴史のうちに「永遠に語り継ぐべきこと、すなわち人性と風俗との種々相を彷彿ならしめて、道徳や芸術や祖国に対する愛を深めさせ、真に教養の具となる事柄だけを記載する」¹⁵⁶⁾と記した。18世紀の歴史観も、こうして実用的歴史観の圏内にあったのである。しかしながらこ

の一般的傾向を離脱していたのは、ヘーゲルが評価するモンテスキューである¹⁵⁷⁾。

モンテスキューもまた、マキャベリの評価については、ボーダンやボルテールとほぼ同様である。『ペルシャ人の手紙』(*Lettres persanes, Persian Letters*)においてユスベクに藉口して「君主達の良心を冷酷にするために、不正を体系化し、その規範を定めその原理を構成し、その結論をひき出そうとするもの」¹⁵⁸⁾とマキャベリおよびマキャベリストを非難する。しかしながらマキャベリは、彼にとって「多くを教える人」¹⁵⁹⁾でもある。

16世紀に生きたマキャベリは、運命のうちに不可知な側面、すなわち宿命と、可知的側面、すなわち法則性とを認め、後者のゆえに運命を操作できるとみなし、自然に対する自由意志の介入の可能性を認めたが、18世紀に生きたモンテスキューにとっては、世界を支配するのは、もはや運命ではない¹⁶⁰⁾。なぜならば、「人間はいかなる時代にも同じ激情をもち、大変革を起す契機はちがっていても、しかし原因はいつでも同じなのである」¹⁶¹⁾から。同様にして諸国の盛衰にも「精神的物理的な一般的原因があり、あらゆる偶然事は、これらの原因に従うのである」¹⁶²⁾から。モンテスキューにとって歴史は、物語りでもなく、神の摂理でもなく、あるいはまた各時代に固有の属性でもない。彼にとって歴史の研究は、因果連関の発見すなわち外見上は多種多様なカオスと見られる諸事実の生滅のうちに、それらの諸事実を貫徹する因果連関の認識を目標とするものであった。こうしてモンテスキューにおいては、歴史の研究は、法則の認識を目ざす科学的課題に資するものとなる。

157) *Vorlesung über die Philosophie der Geschichte*, 武市健人訳『歴史哲学』28頁。

158) *Persian Letters*, Letter XCIV, "The Complete Works Montesquieu," translated from the French in 4 vols, vol. 3, Dublin, MDCCLXXVII, p. 362.

159) F. Meinecke, *Die Entstehung des Historismus*, 菊盛・麻生訳『歴史主義の成立』上, 169頁。

160) *Grandeur and Declension of the Roman Empire*, "The Complete Work," vol. 3, p. 135.

161) *Ibid.*, p. 4.

162) *Ibid.*, p. 135.

152) *Ibid.*, p. xiii.

153) *Ibid.*, p. xxxiii.

154) *Six Book*, I, 1, pp. 2-4. IV, 3, pp. 125, 127.

155) *Ibid.*, II, 4, 5, p. 68. V, 1, p. 153. V, 2, p. 160.

156) 丸山熊雄訳『ルイ14世の世紀』(1) 12頁。

それゆえに『ローマ盛衰原因論』(*Considerations sur les causes de la grandeur des Romains et de leur decadence*)は、『法の精神』(*De l'esprit des lois*)という体系的論理的著述の方法論的前提をなすものと理解されるのである。こうして運命としての自然史的循環のうちに法則性を認識し、これに基づいて運命への挑戦を意図したマキャベリの歴史観は、モンテスキューにおいては運命としてではなく、明確に因果連関とみなされ、政治学を含む社会科学の方法となりえたのである。

あ と が き

以上においてわれわれは、マキャベリの政治理論の方法としての「歴史」観がもつ意味を究明して来たのであるが、第一の特徴としての実用的歴史観について言えば、この歴史観は、古代のそれが道徳的教訓のために歴史を用い、回想や記念として理解されたのに対し、マキャベリのそれは人文主義のうちに認められる政治的関心に基づくものであったことは明らかである。このマキャベリの関心のゆえに歴史は、先人の政治生活における諸経験を意味し、模範とか先例とか言われたのである。そしてこの経験は、イタリアの政治状況の打破のために用いられたのである。それゆえ歴史は、現在に対する係りあいのために用いられた。

第二の特徴として示された循環史観について言えば、マキャベリの歴史観は、古代のそれと

共通の面をもっていたのであった。この歴史観においては、自然的、いな神的規定がその根拠をなしていたのである。

ところで以上の特徴に関連して、以下のような問題が生ずるであろう。歴史の自然主義的把握によれば、歴史の経過は循環とみなされ、それは不可避的必然的であると言わなければならない。言い換えれば、この循環過程は、自然による規定のゆえに人間活動の介入の余地を残さない。それゆえマキャベリの歴史観は、決定論の性質をもつとみななければならないのである。しかしながら歴史が自然によって規定され、不可避的な循環を迎えるとすれば、このような歴史を政治のために用いるという観点は、無意味ではないのか。例えば政体の変動—循環が不可避であるなら、いずれか一つの種類の政体に固執することは意味をなさないのである。マキャベリはしかし歴史を用いると言うのである。すなわちこれの実用化の基礎は、歴史の循環という必然性である。それゆえマキャベリは、一方では、人間は、歴史の経過によって規定されながらも、他方ではこの歴史の経過に内在する必然性を用いて歴史の経過に介入することが可能であることを認める。問題はこうして歴史観の原理問題、すなわち自由論と決定論との問題へ移行行かなければならない。これは自由と必然あるいは *virtué* と *fortuna* との関連を問題にすることによって究明されるべきである。